

コダーイシステムと音楽教育



加勢るり子

はじめに

はないかと思えます。

一、コダーイシステムへの関心

私は、いわゆる音楽畑にいますが、コダーイシステムというものが日本ではあんがい知られてません。そしてこのシステムを理解できるというのが音楽家でなしに、幼児教育のことを実際に熱心に研究しておられる方であるらしいのです。そして私は日本の音楽というものを、正面から考えなおしているところなのです。

私は、私自身が、日本の音楽教育を受けてきた悪い面での典型だと思えます。私が、コダーイシステムを非常にいいと思っていることを、そういう私自身のたどりつきからお話ししていくと、日本という風土の中からアプローチしている、という見方ができ、かえって理路整然とひとつのシステムを概念的にとらえていくよりも、もう一歩進んだ形で感覚的にとらえていただけるので

私が、そもそもコダーイシステムを勉強しようとしたときには、日本には何のデータもなく、知っている人もいませんでした。友だちのトルコ人の作曲家がバルトークを研究しているうちにコダーイにたどりつき、「ハンガリーには良い音楽がある」ということを個人的にきいたことがひとつの動機になり、ハンガリーの音楽教育に興味をいだいたのです。そのうちによく、英語版で出ていたコダーイ著の「ハンガリーのフォーク・ミュージック」という本が手に入りました。その結果、コダーイの考え方がわかったわけです。

それは一口に言って音楽だとか、それにひっかかって教育と

か人間とか、また人類とか哲学とかもくみ入れられていて、私
これまでうけてきた音楽教育にはないものがあるというような気
持がしました。しかしそれだけでは弱くて、私は日本で音楽の先
進国だと思われるヨーロッパをひとまわりして音楽施設、そ
れこそ、幼稚園から上まで全部調べあげてみたいところをでき
だけみて参りました。六カ国まわりました。ウィーン、西ドイ
ツ、カール・ウォルフの研究所、パリでは下からコンセル・バト
ワールまで、またイタリーへも足をのぼし、最後にハンガリーに
行きました。そこへ行くまでに私は、日本でうけた音楽教育を、
もう一度改めて考え直さなければいけないという体験をいろいろ
な国でしたわけです。

どういうことかという点、日本では、音楽教育というと、一般
教育と芸術教育に分かれており、後者の場合はある特定の技術中
心的な幼児のための音楽教室などがあって、そこでスバルタ的に
教育されて技術をつけていく。その方法というのは非常におとな
の方法をおしつけているようなところがあり、それにたえられた
子はある程度実績をあげているといった、ひとつのパターンがあ
って、一般の教育の中の音楽教育とは分けられています。私
は、外国もそんなぐあいだと思っていたわけですが、そんな国
はどこにもなく、私が日本に育っていたためにいろいろな問題意
識をもっていたということだったので。

日本人というのは、私に限らず非常に理屈っぽいようです。私
たちはあんがい理屈で音楽教育をとらえている面が多く、従って
芸術教育と一般教育というふうに音楽教育がわかれていること
もなり、考えてみると、このような現象はおかしなことなので
す。ヨーロッパでは、芸術とは個人的なものだから、組織だてて
学校でやれるものではないという考えの人が多く、またむしろそ
ういう考えが支配的ともいえるようです。

そういう体験を経ながら最後にハンガリーにいきました。非常
に運がよくて、そこでコダーイ・ゾルダンに会えまして、私のも
っている問題をいろいろおききました。そのとき、はじめてコ
ダーイシステムというものには、それまでまわってきたヨーロッ
パの音楽教育（それは、日本が直接音楽教育としてとり入れたも
のです）とちがったものがあるということに興味深く思って、ぜ
ひ、これは本格的にコダーイシステムというものを研究したいと
決心したわけです。

現在、日本では、「ハンガリーの音楽教育」という書物が訳さ
れています。これは、十三人のハンガリーの方々のいろいろな
立場からのアプローチによるもので、それだけ読んでも内容は、
つかみにくいらしいのです。つかめないからいまだに、コダーイ
システムが日本ではわかっていません。本質的なところで私は、
日本の音楽教育に今の時点で、相対的な中で、コダーイシステム

が最もかなっているという信念をもつに至っていますが、まず、日本の音楽教育の内容について考えてみることにしましょう。

二、日本の音楽教育の実態

明治二年頃、はじめて日本に洋楽というものをもってきたのは、イギリス人であったり、ドイツ人であったり、アメリカ人であったりしました。それが吹奏楽だとか軍楽隊にとり入れられ、また伊沢修二という人が外国へ勉強にいってもち帰ったものにより、日本の音楽教育システムが、一応未完成ながらまとまり、それが何となく今日までつづいているわけです。そのときに、日本の伝統音楽というものをどういう位置におくか、という根本的な問題の具体的解決をみないまま、教材から方法まで外国のものが入ってきているという次第なのです。当時、それを批判するだけの力がなかったから仕方がないのですが、そういう過程を経、また、学校唱歌という特殊なジャンルのものを教材に加えながら現在に至っています。

私自身もそういう教育を受けて、順調にそれなりのものを身につけたというわけですが、その点に関して無自覚のままヨーロッパの国々をまわり、つくづく自分の国籍がわからなくなりまして。どこへ行っても日本人の場合には、日本の曲をききたがりません。ベートーベンとか、ショパンを弾いても「よくまあ、外国の

ものをそれだけこなす」それだけの評価しかされません。日本のものを弾いてくれといわれたって私、ピアノの出身なのでちょっとそういうものを持たないわけです。それは、私が受けた教育の中に何もなかったわけですから、戦後の今、音楽大学などに在籍している学生さんのうけている教育をみても同じことで、むしろマスになって非常に多人数になった弊害が加わっただけのようです。私の時代には、それなりに少人数だったので指導が一人一人にゆきわたって、良い先生の音楽的影響があったのですが、今はそれも少なくなっています。そして教材とか方法とかは、それほど昔と変わっていません。それが日本の音楽教育の実態です。

私は、コダーイに会えて、コダーイシステムが自分のものになったとき、はじめて、そこから脱皮できたのです。ずいぶん時間がかかりました。それだけに良さが非常によくわかります。そこで、個人的にですが、実験グループを作り、コダーイシステムに基づいて、幼児の音楽教室を数年やってきました。日本の音楽風土とハンガリーの音楽風土など、いろいろなちがいがらでくる問題の中で、試行錯誤している最中です。

三、コダーイシステムのとらえ方

最近では一週間や二週間、実際にハンガリーまで行った方のコダーイシステムに関する意見をきくようになりましたが、残念な

ことに私が、コダーイシステムをよいと思う、その本質的なものをとらえていないことが多いです。カール・ウォルフとかりトミックとか並列的に並べて、そして方法のところ、これはこっちがいい、これはこっちが悪いというふうな平面的な見方でしかみていないのです。私が、コダーイシステムがよいと思うのは非常に質がちがうからだということをいいたいのです。そのためには、ハンガリーという国と日本という国が似ているということを確認すると、日本人にとって非常に参考になるシステムだということがわかると思うので、このことについてふれます。

これは音楽的先進国であるフランスだとか、ドイツだとかがコダーイシステムをとり入れる場合とは全然わけがちがうと思うのです。日本という国は、音楽的に後進性をもち、ハンガリーとそっくりなのです。しかもハンガリーを主体にして考えると、今、日本は四十年位遅れています。というのは、コダーイシステムが生まれたのが四十年前ですから。しかし音楽教育のメソッドとしては、新しいシステムなのです。ですから世界的に、それまであちこちで用いられていた音楽のメソッドのよいところを、方法としてとり入れている総合的な面のあるシステムなのです。ただ、考え方として一番大切なところは、音楽上の母国語で教育を始めるという（導入するところを音楽母国語です）ことと、万民の音楽だということです。コダーイは「音楽というものは、批判の目

的物として意図されている」といっています。これは非常に端的に、コダーイシステムの特徴をいいあらわしていると思います。

四、日本の音楽教育の現状

ところが日本というと逆で、コンクール主義みたいになってしまつて評価の対象としての音楽というところまでできてくるような気がします。特殊の環境のよい、数からいうとごくわずかな人がその範疇に入れて優れた成果をあげてはいますが、多くの人がとり残されて、こぼれてしまっているわけです。こぼれてしまっているところへ、どんな音楽教育がなされているかといったら、何もないといつてもいい位なのです。

私の子どもは学区制の学校へ行っているのでよく知っています。が、統一されているものが全然ありません。隣の学校では音楽の先生の個人的な意見によって、別の方法でやっている。幼稚園は幼稚園で小学校とつながらないことをやっている。こういうふうに縦のつながりも横のつながりもあります。子どもは、先生の個人的な教育技術にまかされています。非常によい先生が、教材が悪くても、対象にみあったいい教育をしていけば、よい子どもが育つということはいえると思うのですが、そういうことは、最大公約数の一般についていったときには問題になりません。そして、音楽ジャーナリズムにも限界があつて、いろいろなところ

でデータをとってくるとはいえず、いい例としてとってくるものは、個人的にすぐれた人が個人的にやっている場合のものが多くちっとも一般化されていないのです。そういうものをそれだけみて、いかにも日本の音楽教育は立派だ、と思うのは自由ですが、実際はそうではない面もあり、そこを何とかしなくてはいけないということなのです。

学校の中で教えていらっしゃる先生に比較して、私のように、専門的な教育をうけてピアノだけ教えている教師というのは、以上述べたようなもろもろが実感として日常生活に入っていないので気がつかないまま一生を終わってしまうのではないかという気がします。私、子どもの学校へいってびっくりしたことがあります。PTAの会合で（若いお母さまばかりです）、皆で歌える歌はなにかといいましたら、ソーラン節だったのです。そのソーラン節というのを私は知らなかったのです。私は偶然の機会に、日本全国には、数からいってもソーラン節が好きな人の方が、どんなにか多いのだということを目覚めたわけです。

五、ハンガリーと日本の類似性

ハンガリー人というのは人類学的にいうと、アルタイ系のウラル原民族で日本人と同じ起源、東洋の種だということです。言語学的にも両語とも膠着語に属し、日本のことばに構文が似ているの

です。私たち漢字を使っているから言語学的に、中国語に近いかということ、ハンガリー語の方が、よほど近いのです。思考形態や発想が似ているのは構文が似ているからだと思うのですが……。

ハンガリーにも、て・に・を・はにあたるものがあります。日本人の発想で単語を覚え、かえて、そのまま並べていったらハンガリー語になるようなところがあります。ですから日本人には非常に覚えやすいことばです。私もコダーイからハンガリー語を勉強しなくてはだめだといわれまして勉強しましたがわりあいはやくマスターできたのは、そういう類似性があるからだと思います。

ハンガリーではホテルにとまらずに、コダーイやバルトークの直接のお弟子さんのピアノリストの家へ、国から指定されて下宿しておりました。ハンガリー語しか通じない中で、その方たちと生活をともにしましたが、封建的なところまで日本によく似ています。家族の中で人間関係やフィーリングなどです。そして不思議なことに両国とも伝統的な音楽のバターンが半音のないペンタトニックなのです。

日本の伝統音楽の民謡音階も半音がないペンタトニックです。

イギリスとかフランスとかドイツよりも、コダーイシステムをとり入れるのに日本で一番意義があるというのは、この「類似の要素が多い両国」という点にあります。また、人類学とか、言語学上で似ているだけではなく、音楽比較学的にも、これは、コダー

イがやったことなのですが、日本のものと親近性があるのです。それで、日本の子どもが最初に洋楽に出会ったときに、親近性が強いのであれば、自然に自分たちの中に入れていけるだろうと思われるのです。

おとなというのはものを違う方に意識的に分類するのが好きですが、子どもはすなおに似ていることをうれしく感じてしまうのです。バイエルなどは、ソ・ミ・ドという機能音声だけでできしており、白紙の日本の子どもにとっては、非常に遠い種類の音楽でしょう。ところが私の経験では、白紙の子どもに外国のものを入れようとすると、まずハンガリーのものを入れたら非常に親近性を感じるので、これはひとつ大きな要素だと思ふのです。

六、音楽教育と素材

子どもがほんとうに好きなものは、子どもの発達段階にピッチとあったものだと思います。子どもは未分化で純度がおとなより高く、ほんとうに白紙ですが、こうしたことは実際には現場で小さい子どもを扱ってみるまでわからないと思うのですが……。

ところで、大多数の子どもは、うちに洋楽のヨの字もありません。やはり、ソーラン節の方がいいという方が多いと思います。そういう子どもが、学校で集団の中でバツと皆でおそわるのは外国のものが多くいわけです。日本で子どものために作曲されたもの

の多くは、機能音声のもので、それらは音の使い方から何から洋乐的で、子どもたちは、そういう種類の音楽を歌っています。

またピアノとなると、特にひどいのです。歌うことも知らないうちに外国のものがバツと入ってくる、そして、指の訓練から始まる。子どもは自分の中に表現すべき音楽的素材というものが無いのです。素材がもしあるとすれば日本的なもの、ほんとうの日本のものだと思うのです。それでは日本人は非音楽的な民族かという、洋楽という範疇ではなかった場合には、そういう答えが出るかもしれませんが、そうではなしに日本人独特のものがあるかもしれません。この頃では、あるという論がたくさん出てきて、わらべ歌を素材にしている教育グループもあるようです。

七、コダーイシステムの有機性

コダーイシステムがやったような下から上まで有機的に関連をもたせたシステムは悲しいかな、日本には何もありません。

コダーイシステムで一番大事なことは、すべての人にかんた方法をとっていることです。そしてすべての人が小さいときからずっと大きくなって年をとっていくのに従って、音楽史の発展過程を踏み、これにあわせて勉強していくのです。その最初の段階では、幼児にみあった二音とか三音とか、声帯や生理的な機能を考えあわせた上で、やさしくしかも幼児の呼吸にあったものを

使います。という自然に、子どもの中から生まれたわらべ歌と
いうことになるので、ハンガリーではわらべ歌を使っています。

ハンガリーの場合、そういう教材をつくる前に（今から四十年前、
コダーイの音楽教育理念がシステム化される以前）、コダーイと
カバルトクとかが、自分の国の伝統音楽の根源的なスタイルを
みつけ出そうというので、隣接民族のもついろいろな民謡を採譜
しに出かけて行きました。そして集めた民謡の分析・分類・比較
の結果、ハンガリーの音楽の根源的なものを見つけたわけです。

このような学問的にも立派な業績をふまえた上で、コダーイシ
ステムというものは考えられ、それにより実践されているので
す。今の日本の音楽教育には土台といえるものが何にもないわけ
です。わらべ歌の採譜、研究が行なわれているといっても個人的
なものが多いし、日本の伝統音楽にはいろいろなものが多種多様
にあるので、それらを一括することがむずかしいのかもしれないま
せん。そういうことを棚にあげて、ドイツから来た教材や方法で音
楽教育がほどこされたわけです。

八、コダーイシステムの普及

ハンガリーの場合も四十年前には日本の現状と同じような状態
だったのです。ドイツの音楽で、ドイツの方法で、選ばれたハン
ガリーの上流階級だけに音楽教育があつて、大部分のハンガリー

人との間には断絶があり、その差はひどかつたらしいのです。大
部分の人は閉鎖的に民謡にとじこもつた農民層でした。コダーイ
はその農民の音楽の中に非常に純度の高いものがあるということ
をみつけ出して、今いったような、コダーイシステムにまで作り
あげたのです。コダーイシステムは、現在、全世界で約千の学校
で採用されていて、その中には、ロンドンのエフディ・メニユー
ヒン（有名なバイオリンリストで学校をもつており、そこで採用
している）、それからベルネのコンセル・パトワールがあり、ソ連
では、たくさんコダーイの方法で音楽教育を行なっています。フ
イジー諸島の学校でも採用されており、アメリカのスタンフォード
大学には、コダーイシステム研究所がおかれています。ともか
く、コダーイシステム自身の歴史が四十年という新しいシステム
で、現在だんだん世界中に普及されつつあります。

九、コダーイシステムと伝統音楽

コダーイが強調したように、伝統的なものは、どこまでも子ども
もの遊びと結びついているので、私は、これをどうしても日本の
子どもの教育の場で生かしてみたいと思います。ところが、わら
べ歌をやっていますと邦楽につながってしまつて、なかなか洋楽
につながりません。ハンガリーのものは、たまたま西欧の七音階
につながりやすい伝統音楽なのです。ハンガリーの場合、自国の

音楽から導入して行き、その同一線上にヨーロッパの芸術音楽へとつなげていくことができました。線的なもので入って機能と声と幅を広げ、そして現代音楽の世界へと導いて行く、これはヨーロッパ音楽の音楽史的な発展過程といえるもので、コダーイは、コダーイシステムの中で、この過程を子どもにも再体験させるべく考えているわけです。その最初の素材が伝統音楽だったといえます。けれど決して生のままの伝統音楽だけではないのです。

十、コダーイシステムの柔軟性

教条主義でひとつのシステムをとらえますと実体がわからなくなると思いますが、コダーイが私に一番いい先生のところを見なさいと紹介してくれた音楽小学校の先生は自分で音楽教科書を作っています。ちゃんと小学校の一年生に自分なりにあてがっています。この個人的なものが非常に高く評価されています。そう、生きていく柔軟性がある、いいものはいいと判断して、ちゃんと生かしておく。側面表面だけみて理論的にすばらしくまとまっています、これがいいといっているのではなしに、それプラス柔軟性です。それと一番大事なのは、現場の先生と作曲家と編集者と、月に一回、ディスカッションする場があるのです。ディスカッションしたものが実って、三年に一度音楽教科書が改訂されるしくみになっています。こういう状態が次から次へと流動的

に動いて、らせん階段をあがっていくようなシステムです。これが、日本にとり入れられたいへんいいと思われる理由です。

十一、ハンガリーの教育制度

制度のことですが、ハンガリーの幼稚園は、日本でいう保育園と幼稚園のあいの子のような性格で、零歳から三歳までは乳児院があります。ほとんどの家庭では共がせぎなので、赤ちゃんが生まれるとすぐ乳児院へつれていきます。日本では、たいへんだと思うでしょうが、やたらに乳児院の数が多いので、実に簡単なものです。幼稚園は十二時間保育です。その中で、ちゃんとコダーイシステムの内容をおさえた面があります。

ハンガリーでは、三歳から六歳までの子どもが幼稚園へ行っています。その幼稚園から小学校、中学校（それぞれ二種類あります）それから日本で言うところの高校にあたるコンセル・パトワール、大学となります。そして、一種類が一般幼稚園、一般小学校というふうになっています、もう一種類が、音楽がついていて、音楽幼稚園、音楽小学校というふうになっています。義務教育が十年間で小学校が八年、そして中学が四年ですが、前の二年間が義務教育であとの二年間から専門教育にわかれます。コダーイシステムと言われているものは両方にあてはまっています、音楽のついている学校は、時間数が多いだけです。そしてだれでもどっちでも好き

な方を選べます。とる方は、とくによりわけることはいけません。

この国が、国としてコグーイシステムをとり入れたとき、ある科学的な方法がとられました。制度上二種類の学校ができたので、そのときから両方の追跡調査が行なわれました。四十年経ってその結果、音楽小学校で勉強した子どもの方が、中学に行くまでに忍耐力・集中力・応用力がついているという、はっきりした数字が出てきています。それで、音楽中学校の部分が今までは弱かったのですが、今後は音楽中学校の方をふやすという方針が決まったところだそうです。ハンガリーの場合、これからますます音楽は盛んになるだろうと思います。

十二、コグーイシステムを応用してみて

私自身、実験グループをもってみますとほんとうに集中力が出てきます。今日の日本ですとおかしい現象が加わってくるのですが、散慢で音楽が弱いという子どもが対症療法的な目的でうちの教室へも来るわけです。そういう子どもをいっしょうけんめいやってみましたら、すっかりかわってしまってお母さんに非常に喜ばれています。この場合も特にどうってことはないで他の子どもと同じようにコグーイシステムの理念でやっているのですが、三ヶ月でみちがえるようになったうれいし事実なのです。日本で不完全な方法で行なってもこれくらいの効果あげています。ハ

ンガリーのように国家単位で横の連絡もとれている、縦の連絡もとれている、それで音楽教育がされたら、非常にいい子が育つというのはあたりまえだと思うのです。

おわりに

幼児の教育というものはたいへんむずかしいものです。たとえばピアノの技術があつて、曲をバラバラと弾ける先生がいたとしても、ソルフェージュの能力のある先生がいたとしても、幼児を教えた場合にどれだけ効果があげられるか、これは非常に疑問です。幼児は未分化なだけに、先生は幼児のすべてを知っていることがたいへん大きな前提になると思います。むしろ、そういう勉強をピアノの先生とか専門家がしない限り幼児を扱わない方がいいと思います。もし扱うのだったら責任感とか教育の価値を自覚した上で、常に勉強しながらやっついていかなければいけないのです。これからの音楽教育を考えると、すでに奇型に育ってしまった人は、よほどの契機がなくては変われません。ですからこれから世の中に出ていく方がたは、児童一般教育というものとご自分の音楽の勉強を、ともにして下さって、そして両方の面で、子どもに対して下さる、そうすれば音楽教育はもちろん、一般教育の面にも効果があると私は思います。

(お茶の水女子大学において六月十七日におこなわれた講演より)